

思い出草

佐々木義武

大平兄と私の交友は、戦前興亜院時代から始まっており、四十数年に及んでいる。私は満鉄調査部から興亜院華北連絡部（北京）に出向し、大平兄は蒙疆連絡部（張家口）に大蔵省から派遣されてきておりました。当時、張家口と北京は隣組のようなものでしたので、絶えず往来しておりました。そんな関係で自然、友情が深まってきたのでしよう。その間、東京で企画院主催でしたが、東亜全域にわたる関係機関の大集会がありまして、大平兄は蒙疆代表として素晴らしい報告をしたことがございます。この男は出るところへ出るとたいしたものだなあ、と改めて見直した記憶があります。また、後になって分かったことですが、大平夫人は鈴木正氏（小生の従兄弟）夫人の妹君であるので、私と大平一家とは全然無縁ではなかったということにもなります。

興亜院という役所には一風変わった役人が集まっており、そのなかでも特に気心の通ずる連中で九賢会というものを作っておりました。大平兄もそのメンバーの一員ですが、焼きイモが好きで、大平兄が出席すると必ず焼きイモをお相伴させられたことが不思議に思い出されます。この会は現在も続いております。

しかし、何といっても盟友の契りを結んだのは政治の場においてであります。二十数年前、私が突如、原子力局長の職を辞して、初めて総選挙に出馬した時のことであります。私はまず決意を池田内閣の官房長官であった大平兄に告げたいと思い、長官室を訪ねたところ、岩波文庫かを熱心に読んでいた大平兄は、本から目を離さず「オイ、佐々木、何しにきた」というから、実は総選挙に出るつもりで挨拶にきたと答えると、「エッ」と驚いて、

私をジーツと見つめておりましたが、やがて、「オオ、それはいいな、早速だが池田にも挨拶しろ」というので、そのまま総理大臣室に引つ張られて行きました。そして、夕刻、築地の「栄家」で待つておつてくれといつて別れました。「栄家」ではいろいろ話がありました。選挙は「自己に克つ」ことが最も肝心なことだと諭されたことが印象的です。初陣は九死に一生を得るような辛勝でした。池田総理に「私は池田派というよりは大平派一号です」と申し上げましたら「大平派などというものはないよ」と大変叱られたことも覚えております。

政治生活満二十年間、大平兄とは全く苦勞をとみにいたしました。宏池会改革事件、日中航空協定問題、拳党協事件、総裁予備選、政権四十日抗争等々、大平政権への道は険しく、長く、苦悩に満ちたものでした。その間、大平兄はゆるぎない世界観、人生観のもと、忍耐力、包容力、柔軟な対応力等、卓抜したリーダーシップを発揮されました。大平邸を訪れて帰宅する途中は、必ずといっていいほどぼのぼのとした温かみを心に刻まれていた。次に、明るい楽しい思い出を一つ述べます。一昨年夏、大平兄が秋田の政経パーティーに出席された時、深山の静かなところにつれて行けと注文されるので、田沢湖に一泊、翌日は八幡平の雄大な風景を楽しむ旅に案内いたしました。奥羽のこの山岳地帯が大変気に入ったとみえて、その後もしばしば追想しておりました。その帰途、岩手県内でゴルフをしようというのでお伴をいたしました。この日は全くの「好調先生」で、多分空前絶後でしょう、八四くらいで回ったものでした。

最後に、十数年前のことですが、財界の巨頭・普礼之助翁が、ある時、「佐々木君、大平はやがて歴史に残る名宰相になるヨ」と申すので、「私もそれを楽しみにして兄事しているのですが、どういふ宰相になるとお思いですか」と問い返すと、普翁は「サア、漢の高祖だなア」といい放ちました。大平兄にこのことを伝えると、さすがの大平兄も「ウーン」と唸ったままでした。

(衆議院議員・第二次大平内閣通商産業大臣)